

震災を経て、いま感じていること

市民社会コンサルタント 村上 徹也

あの日の午後、新宿西口の高層ビルの1階にあるカフェでパソコンに向かっていた私は、突然隣の席の見知らぬ男性に肩をぎゅっとつかまれた。怪訝な顔をする私に彼が、「地震じゃないですか」と声をかけるのとはほぼ同時に、激しい揺れが始まりました。その場の誰もがこれは大きな地震だと直感して騒然とする中、私はとっさにパソコンをカバンに放り込み、店のドアを開け外に飛び出した。見上げるとものすごい轟音を響かせながら高層ビルが折れてしまうかと思うほど揺れていて、いいよのない恐怖を感じた。それは、地面から伝わる体を振り回すような振動がかき立てる不安と相まって、ある種の諦念を生じさせた。「あがいてもどうしようもない」というあの時感じた無力感は、いまでも時々よみがえる。

しかし、その少し後には地震の揺れはこれ以上大きくならないと感覚が教えてくれた。心に芽生えたあきらめの境地は一瞬にして消え去り、これから生じる様々な状況と、その中でなすべき行動の数々が、まだ地震の揺れが続く中で頭の中を駆け巡り始めた。

まずやったことは、それぞればらばらな所にいる家族全員に向けて、自分の無事を知らせ、安否を確認するメールを打つことだ。揺れが収まる前に送信できたメールに対して、家族全員から数分の内に無事を知らせる返信が帰ってきた。次にしたことは、最寄りのコンビニに飛び込んで、携帯電話の電池式充電器を2つ買ったことだ。そのおかげで、携帯電話は通話の役には立たなかったが、その後、埼玉の自宅に徒歩でたどり着いた深夜2時まで、ネットを通じた情報収集のツールとして活躍してくれた。

長々と自分のことを書いた。私がいかに冷静に行動したかを誇りたいからではない。そもそも、「地震に驚いていきなり建物の外に飛び出したり、大規模災害直後に歩いて帰宅したりするなどは、落下物に直撃されたり大火災に巻き込まれる恐れがある」と防災の専門家からは怒られるだろうから、自慢にもならない。

ただ、震災を覚えていま何を感じているのかを考えたとき、あの瞬間の自分を振り返るところから語り始めたいと思った。

あの時、情報収集のために立ち寄ったJR新宿駅の街頭テレビ

に映し出された巨大津波のライブ映像を見て感じた、内臓がブ
ラックホールに引きずり込まれるような暗く恐ろしい気持ちもい
まなおリアルによみがえる。直接被災してはいないが、そんな私
にとつても、2011年3月11日14時46分は人生の特異点になっ
たと感じる。人生を川の流れてたとえるならば、あの日が分水嶺
になっていて、それ以前の流れとは全く違う海へといまは流れて
いるような感覚だろうか。

発災後すぐには被災地に入らなかった今回とは違い、阪神淡路
大震災の時には数日後から現地のボランティアコーディネーター
として私は活動した。あの時も、私にとつては大きな転機になっ
たといえるが、それは当時の職場だったボランティア活動の推進
団体での担当業務が、被災地から戻ると大きく変わっていたとい
うようなことだった。それはあくまで私にとつての変化であつて、
多くの人たちと変化を共有していたわけではなかった。

では、いま多くの人たちと共有していると私が感じている変化
とは、何なのだろうか。人間が創り出す物質文明に懐疑的になり、
暮らしの軸を自然との共存の方向に少しずらし始めたことだろう
か。そうかもしれない。私たちは、堤防も建物も破壊し尽くす津
波の圧倒的な力や、ひとたび暴走を始めたなら取り返しがつかない
災いをもたらす原発の恐ろしさを知った。

被災地の苦境をわが事と感じて、1人ひとりが何かを我慢して、
社会の安全安定を優先しようとし始めたことだろうか。そうかも
しれない。私たちは、家族の命、住んでいた家、生きるための職
場などを失い、うちひしがれながらも助け合い秩序を保って避難
生活をされている被災者の姿に、日本人の特質を再確認した。

行政制度を過信せず、人と人のつながりを大切にして、主体的
に判断して暮らしていこうとし始めたことだろうか。そうかもしれ

れない。私たちは、庁舎や職員が津波にのまれ自治体機能が失わ
れた窮状、復興を誰のリーダーシップで進めるのか混迷が深まる
ばかりの国政の惨状も目の当たりにした。

でも、それはどれも震災前から私の心の中に芽生え、徐々にで
はあれ実際に始めていたことだ。だとすれば、私は何も変わって
いないのか。いや、ばらばらだと思っていた多くの人たちと同じ
思いや願いを共有していると感じているという点で、以前といま
の私は全く違う。いずれまた、みんなばらばらだと感じる自分に
戻るかもしれない。それは、振り子の運動のように自然なこと
だ。しかし、震災による社会的な困難とともに体験した私たちが
強めている共生意識を、非日常ではなく日常の地域におけるボラ
ンティア・市民活動の持続的な力にしていくにはどうすればよい
のか。私の一番の関心はそこにある。

村上徹也 (むらかみ・てつや)

市民社会コンサルタント、
東京ボランティア・市民活
動センター運営委員



大学卒業後、日本青年奉仕協会 (JYVA) の1年間
ボランティア計画に参加。1983～86年までNGO
のボランティアとしてバングラデシュで活動。帰国
後、JYVA職員となり、国際事業担当、ボランティ
ア学習事業担当。99年から2002年まで、「2001
年ボランティア国際年推進協議会」事務局を担
当。02年から04年まで、全米ボランティアセンター
「ポイント・オブ・ライト財団」にてサービスマニ
ングについて研究。帰国後、04年12月から市民社
会コンサルタントとして活動するかたわら、11年4月
から日本福祉大学にも教授として在籍。